



INAX MUSEUMS

INAXライブミュージアム

NEWS LETTER

特集

世界のタイル

山本コレクションにみるタイルへのまなざし

vol. **29** | 季刊 **秋**
2013



CONTENTS

INAXライブミュージアム
NEWS LETTER

vol.29 | 季刊 秋
2013

表紙写真
ワークショップで造った「こかげかあさ」でひと休みしていたのは、岐阜県大垣市在住のご家族。「ずっと来てみたいと思っていたんです」。陶楽工房で「夏の想い出BOX」を体験されました。
(2013.8.23)

撮影：加藤弘一

01 [特集] 世界のタイル —山本コレクションにみるタイルへのまなざし

LIVE SCHEDULE

これからの催し

- 06 企画展「ラスター彩タイル—天地水土の輝き」展
企画展「建築の皮膚と体温—イタリアモダンデザインの父、ジオ・ポンティの世界」展

LIVE REPORT

開催報告

- 07 だろの遊園地 2013～子どもは遊びの天才だ～
テラコッタパークのライトアップ
- 08 LIXIL ギャラリー特別巡回展「中谷宇吉郎の森羅万象帖」展
関連企画 ひんやりきれい!“雪と氷”のふしぎ実験
LIXIL ギャラリー特別巡回展
「集落が育てる設計図—アフリカ・インドネシアの住まい」展
関連ワークショップ みんなで住みたい土の家
- 09 フォトコンテスト 2013 入賞・入選作品決定
南陵中学校作品展
光るだろだんご大会 2013

特集 世界のタイル 山本コレクションにみるタイルへのまなざし



旅に出かけてみたい。

世界のタイルの道しるべに、世界のタイルの旅に出かけてみたい。

山

山本正之さん（1920—2000）。淡路島で育った少年時代から、やきものに囲まれて育つ。上京し、伯父が経営する、日本のタイル販売と施工業の草分け「丸西タイル」に入社（のちに代表取締役社長）。

太平洋戦争の終結、復興、高まる建設需要。山本さんは成長するタイル業界をけん引してタイル施工の技術開発、普及、人材育成に邁進する。海外での技術指導で各国各様のタイル文化に触れ、タイル蒐集と研究にのめり込む。訪れた国は世界50か国以上。たった一片のタイルが、その国の風土や歴史を語り、暮らしや文化を示すことを教えてくれた山本さん。残された言葉を道しるべに、世界のタイルの旅に出かけてみたい。

上：世界のタイル博物館 常設展示室 下：シリア、パルミラ遺跡に立つ山本正之さん。（1987年2月撮影） 左：イズニック・タイル／14～17世紀後半、オスマントルコの窯業地イズニックに由来するタイル。「ターコイズブルー」と「トマト赤」と呼ばれる釉薬が特徴。

常滑から*

28



常滑の市「一六朝市」

地元で獲れた新鮮な野菜や果物、海産物などを販売する店が仮設で集まり、にぎわう朝市。その土地の食や生活、風土などが見て取れるほか、売買を通して地元の人たちと触れ合えるのが魅力で、観光スポットになっている所がたくさんあります。東海圏では、江戸時代中ごろから続く飛騨高山朝市が有名ですが、常滑でも「一六朝市」が50年以上前から開かれています。一と六のつく日の朝7時すぎからお昼頃まで、常滑駅から約8分、バス*で南へ下った広場にテントを張ったお店が立ち並び、鮮魚や青果などの食料品のほか、花や乾物、衣料品、履物や日用雑貨などが売られています。旬の物が「新鮮で安く」手に入るため、地元住人だけでなく、東海市や知多市など近隣からも買い求めに訪れます。

立花嘉乃（企画担当）

*知多バス「河和駅」行き「樽水」下車徒歩2分

※INAX創業の地・常滑の人、風景、できごとなどを、INAXライブミュージアムのスタッフが伝えます。

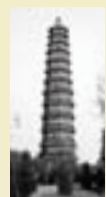
多くの国でタイルの破片は、遠い日本から来た私に拾われたがって呼んでくれる。何気なく足元を見ると、不思議なことに必ずといっていいほど落ちていた。嬉しくて嬉しくて、まず掌にのせて重みを感じ、やがてじっと見つめると、その土地の土・砂・水などの環境もわかってくる。タイルがどんなふうに使われるのか、どんな人が施工に携わっているのかも。旅に出ると、いっぱい教えられる。

山本正之*

「かつての窯場などでかけらを拾ったときの感激は忘れられません。手にした陶片を見て、『単弁だから初期の屋根瓦』などと推定します。一片のかけらから、おぼろげながら文明の姿が見えてきます。何千年もの記憶がたどれるのです。」

「中国のタイル」より

悠久の中国



山 本さんは、昭和30年、初めて中国の西安を訪れる。以降、蘭州、敦煌、ウルムチ*と、どんどん奥地へ赴き陶片を蒐集していく。現地の空気、現地の土に触れることを、なにより大切にしていた。「塼」とは、土のかたまりを低火度焼成で焼いたもの。いわばレンガの最高級品。優れた窯業技術を誇る中国で、紀元前1000年頃から存在し、造墓文化や仏教と結びつき、独特な発展を遂げた。

「若い頃、飲み屋の足置きに使われていたのをみたのが、塼との最初の出会いでした。その頃、私は酒も飲めないのに、塼目当てにその飲み屋に毎日のように通いました。やきものを眺め、馬の駆ける図柄の凹凸に手で触れるためです。」

「中国のタイル」より



鳳凰画像塼

漢 340×340×40mm
四神の一つ、想像上の霊鳥である鳳凰が描かれている。



押型千秋万歳敷塼

漢 330×330×60mm
長寿・繁栄を願った文字と幾何学文を配している。

*西安(シアン)かつての中国古代王朝の都・長安/蘭州(ランジウ)黄河とシルクロードが交わる地点として発展した都市/敦煌(トンゴウ)かつてシルクロードの分岐点として栄えたオアシス都市/ウルムチ(ウーラムチ)新疆自治区の中心城市。タシュケントなど西方との結びつきが強い。

タイルの源流を求めて

古代オリエントからイスラーム



タ イル屋の眼で古代文明を見つめ直す。山本さんは、タイルの源流を求めて中国からシルクロードをたどり、四大文明の遺跡をめぐった。エジプト、ジェセル王のピラミッド。その地下通路に張られた寶石のような青色のやきものは、世界最古のタイル。古代メソポタミアの宮殿で使われていたのはクレイベグ「粘土釘」。はじめは補強材として使われていたクレイベグが、次第にモザイクのように組み合わせられて、装飾的な壁面を構成していく。古代文明には、建築装飾材としてのタイルの原点があった。

「ジェセル王のピラミッドは、タイルを壁に装飾用として使った、おそらく最初の例です。興味深いことに、タイルの裏面に凹凸を設けてタイルを連結して張り付けるといいう施工方法がとられています。4000年以上も前にそういう技術をすでに人間が考え出していた。驚くべきことであり、そうした先人の苦労の上に現在の技術があることをあらためて思い知らされました。」

「オリエントのやきもの」より



エジプト
ファイアンス・タイル*

世界最古のタイル。
紀元前2650年頃
70×37×12mm

*粘土を使わず石英を粉末にして練り固め天然ソーダに酸化銅を混ぜ施釉して焼成したもの。

7 世紀のアラビア半島を起点として、短期間に広大な地域に拡がったイスラーム文化。厳しい風土の中で生き抜く人々がよりどころとした神への信仰が、幾何学模様を極めた装飾の美をつくり出し、礼拝の場であるモスクや王侯貴族の居館を飾った。その技法はラスタール彩、モザイクタイル、錫釉色絵タイルなど多岐にわたり、イスラーム文化の高い窯業技術を物語っている。



クレイベグ

建築の装飾材料に使われたウルク*の土製の釘。
紀元前3700-2850年頃
直径 60×113mm

*メソポタミアの都市国家の一つ。



ラスタール彩
花鳥文星形タイル
イラン 13~14世紀
210×210×13mm



ラスタール彩星形タイルと
青釉十字形タイル
イラン 13~14世紀

「イスラームのタイル」より

*「日本のタイルを切り拓いた山本正之さんの軌跡」より、「世界のタイル・日本のタイル」掲載。引用書籍はいずれもLIXIL出版

「装飾」が花開く ヴィクトリアン・ タイル



イ スラームのタイル装飾と窯業技術がイペリア半島を経てヨーロッパに伝わる。スペイン、オランダ、それぞれの国でタイル文化が花開いた。そして産業革命を背景に、経済的繁栄が最高潮に達したイギリス、ヴィクトリア時代。総称してヴィクトリアン・タイルと呼ばれる多種多様な表現のタイルが生まれる。近代化を押し進めるミントン社やモーター社に代表される大手メーカー。その一方、手仕事を強調しながら独自の製法を確立したウィリアム・モリスやウィリアム・ド・モーガンの小さな工房。多彩なヴィクトリアン・タイルは、豊かになった市民階級の暮らしを華やかに彩った。

「私の蒐集品のなかから、ヴィクトリアン・タイルの範疇に入るものを整理してみると、およそ一千点近くにもものぼったので我ながら驚いた。裏型から判別できるそれらのメーカーも、ウェッジウッド、モー、ジョンソン、ド・モーガンと20を超える。これを機にヴィクトリアン・タイルのふるさとを今一度自分の目で確かめようと、ストーク・オン・トレント再訪の旅に立った。」

ヴィクトリアン・タイルより



多彩草花文
手書きタイル
William de Morgan
19世紀末
157×157×12mm



緑色
単彩レリーフタイル
H.&R. Johnson
19世紀末～20世紀初
153×154×10mm

1 多彩草花文
チューブライニングタイル
19世紀末～20世紀初
151×151×9mm



単彩草花文象嵌タイル
MINTON&CO.
19世紀末
151×151×24mm



日本のタイル、 古代から近代へ



古 代、百済からやって来た瓦博士（瓦の専門家）が埴に関する技術を日本に伝え、7世紀以降に建てられた各地の仏教寺院では、瓦や敷瓦*、埴といった陶製の建築部材が出土している。山本さんは、「タイル以前の日本のタイル」としてこれらに光をあてた。

16世紀に茶の湯が広まり、茶人たちは敷瓦や花壇の土留め用陶板を茶道具として転用。その風雅を好んだ。江戸時代には瀬戸で茶の湯のための鑑賞価値の高い陶板が多く生産される。当時始まった磁器・新製焼に対して、従来の陶器は本業焼と呼ばれ、この本業敷瓦が、幕末から明治期、輸入タイルの影響を強く受けて、本格的なタイルの先駆けとなっていた。さらに洋風の建物が建てられ始め、いよいよ国産タイルの生産が本格化。関東大震災で大きな転換期を迎えたタイルは発展の道を進んでいく。

「多くの人は、タイルを、明治の文明開化とともにわが国に舶来したものが起源と誤っておられる。しかし、日本にも古来、タイルと呼んでいいものがあつたのです。」

「日本のタイル」より



辰砂釉花壇瓦
18～19世紀 307×283×37mm



寸松庵伝来花壇瓦
茶人、佐久間将監しやうかんによって江戸時代に建てられた京都・寸松庵の花壇の土留めに使われていたものと思われる。現在では茶道具の敷板の最高級品として珍重されている。



多彩草花文
レリーフタイル
佐治タイル 20世紀
152×152×10mm



瀬戸本業
染付草花文敷瓦
19～20世紀
245×240×18mm

探究心に満ちた 旅の先に

山 本さんの旅の成果は、「世界のタイル博物館構想」として現れる。1991年、山本さんは約6000点のタイルを常滑市に寄贈。貴重な資料はINAX(当時)が科学的な調査・分析を実施。一片のタイルが持つ奥深さを山本さんと共有し合うなか、博物館の建設が具体化していく。「これは日本のどこもやっていない分野。ただ鑑賞するだけではない、その地域の文化、使われ方、科学的裏付けもわかる特徴ある博物館を」。その言葉を受け、管理研究と一般公開を目的に1997年、「世界のタイル博物館」は開館した。山本さんが足で集めたタイルの数々が、今、館内を飾っている。

山本正之さんの長女
三嶋英子さんが語る
父の思い出

24時間365日仕事中心だった父は、タイル、やきもの以外、趣味もなく生涯現役で人生を終えました。家のあちこちに陶器やタイルが乱雑に置かれ、「このタイルはね」と家族によく話をしてくれましたが、聞く方は「ふんふん」って。「とにかく手で持ってみないとわからないんだよ」と、よく持たされました。父はきれいなものより、割れたものの方が好きでした。素材や釉薬の成分の手掛かりがつかめるからです。母から聞いた話ですが、海外に出かけても、観光や食べ物にはまったく興味がなく、タイルがありそうな場所を探して日が暮れるまで帰ってこない。工事現場に遭遇すると、勝手に足場に上って作業している人と仲良くなって、タイルの張り方などを聞いている。帰りには、拾ったものでトランクがいっぱいになったそうです。

世界のタイル博物館に行くと、家ではガラクタのように見えたものがきれいに飾られていて、あらためてタイルの美しさを感じます。それを見てみると、「ほら、持ってみたらいい」と差し出す父の手が思い浮かびます。その場面が私のかけがえない思い出です。(談)

